

創立 60 周年記念誌より 〈剣道部の思い出～南関東の雄として～〉

昭和 7 年卒業生 押本孝一 様

剣道部の思い出は数限りあるが、今の剣道界に特筆すべきわが校の歩みが我々の誇りとして、今も残っている。昭和 2 年から 3 年にかけて、全国中等学校選手権の南関東ブロックのシード校として君臨した。そして巣鴨中学とともに、常に東京を二分する試合が多くあった。交流稽古では、たびたび本校にも来たが、巣鴨の道場と違い、本校の道場は校舎並みのウナギの寝床で幅がなかったので、突きを受けると窓の腰板に押し付けられる始末で、技より校舎に引け目を感じていた。

また、いま流行りの合気道も、高校では草分けであった。今宗家の上村吉祥丸氏の父が本校の矢吹先生の道場に剣道を習いに来たことから、先生は合気道を知り、合宿の余興として我々に教授された。比較的小柄な先生が合理的に巨漢を投げるので、同じく小柄だった影山親雄君は、懸命に習熟し上手になった。そして大いに気を吐いたことを覚えている。

昭和 7 年の関東大会だったと思うが、巣鴨が抜けて一同必勝を期して参加した。しかし決勝で逗子開成中学と争い、その先鋒が二刀流で、副将沼崎まで総なめにあい、大将山内勇夫がかろうじて引き分けて零敗の憂き目にあった。涙の反省会の口惜しさが、いまでも身に染みている。その後、矢吹先生の命で、私は二刀流を習得し、今日でも「喬松の二刀流」として反骨をかこっている。

また、日本選手権 2 回優勝の豪勇羽賀準一先生は、我々が 5 年生の時、肺を患い喀血しており、今生の名残に東京見物のために矢吹先生の所へ来ていたが、合宿していた我々とともに払暁の養魚釣り、道場の掃除、学校の有志による稽古に参加し、剣道によって療法された。これで喀血が収まったのに意を強くし、進んで出稽古にも行き、当代無双と呼ばれるようになった

たことは、「喬松の修業」として剣道界でも話題になっている。

特筆すべきことは、昭和 23 年に東京剣道連盟の下部団体に登録し喬松支部が発足した。これは各区の支部が三段までの昇段審査が可能であると同格で、大学でも簡単にはできないことが、巣鴨と本校の 2 校だけに許可されていた。ちなみに卒業生のメンバーは、三段から六段までで 40 名にも及ぶ陣容であった。

こんな由緒ある我が喬松は、40 年を経てなお多くの剣友と交流し、現在の芝商になっても現代剣道の名脈を保っている。しかも近頃は多くの女流剣士が活躍しているのを見て、大いに意を強くしている。伝統はそこにあったものではなく、長い間に皆で努力して受け継いできたものであることを銘記し、文武両道の名門の灯を消さぬことを望んでやまない。